

---

# ギリシャ神話異聞

Akka

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ギリシヤ神話異聞

### 【Nコード】

N2706L

### 【作者名】

A k k a

### 【あらすじ】

以前短編として投稿した「ギリシヤ神話異聞」を連載に変更いたしました。人間と同じように泣き笑い恋をして嫉妬する神々の物語を、私見と偏見を交えて紡いでいます。正統なギリシヤ神話がお好みの方は、回れ右をお願いします。

## 冥府の光（前書き）

「冥府の光」は以前「ギリシャ神話異聞」として投稿していたものを加筆修正したものです。

## 冥府の光

天界を統べし大神ゼウス。

地上に豊饒を与えしデメテル。

偉大なる父に慈しみの母。

どうかこの世界が平らかであるよう、お力をお授けください。

「コレー！」

コレー  
娘と呼ばれて振り向いたのは、柔らかな陽の光を集めた髪と若草の瞳をした女だ。

女、というにはまだ若いかも知れない。

その身体は成熟一步手前、あどけなさど艶が混ざり合ったような、つい手を伸ばしてみたくなるような存在だ。

しかし、コレーはどの男のものになることもない。

彼女は豊饒の神デメテルの娘。

母が処女神にすると決めて大切に大切に慈しんできたことは誰もが知っている。

デメテルを怒らせてしまえば、実りはなくなる。

ゆえにコレーは絶対の庇護を与えられた存在であった。

「コレー、あちらに綺麗な花が咲いていてよ？」

ニンフがそう言うのを聞いて、コレーは踊るような足取りで立ち上がる。

「デメテル様もいらしているわ。行きましょっ？」

「お母様が？なら、道すがら花冠を作っていきましょう」  
ニンフが花を摘みコレーに渡すと、コレーは器用な手つきでそれらを編み上げていく。  
デメテルのもとにつく頃には、即席とは思えない仕上がりになっていた。

「お母様、お疲れではないですか？」

花冠を差し出しながら案ずる娘にデメテルは笑う。

「大丈夫よ、私のコレー。あなたは私がない間、何か変わったことは無かった？」

ニンフが口々にさすがはデメテル様の娘だと腕前を褒め称える。誰にでも温かな微笑を振りまくコレーは、人の悪意を知らない。

よってデメテルが心配し続ける理由もはっきりとは理解していなかった。

「何もないわ。お母様」

「心配なのよ。あなたが汚い男の手に触れられてはいないか。あなたの父のような……野蠻な手に」

デメテルはゼウスの強引な手段によって、コレーを授かった。愛しい娘。産んだことは全く悔やんでいない。

しかしゼウスを憎く思う気持ちは消えていない。  
コレーだけはあんな目にあわせるものかと、成長していく姿を見ながらデメテルは心に決めてきた。

「心配しないで。お母様。私はいつもこの野原にいるわ。こんな綺

麗なお母様の恵が行き届いた場所で、誰も悪いことなんて出来やしないわ」  
こんな穏やかな時間が、ずっと続くはずだった。  
誰もがそう信じていた。

北の地に恵を届けに行くデメテルを見送り、今日もコレーは花と戯れる。

同じように繰り返してきた毎日。

きつともうすぐニンフたちがやってきて、出来上がった花冠をみてさすがはデメテル様のコレーだと誉めそやすだろう。

何かもう一つ花が欲しい。

そう思つて立ち上がったコレーの目に、一際美しい花が飛び込んできた。

真っ白な花弁の凜とした風情の花。

駆け寄つて手にしようとしたその瞬間、日が翳つた。

ぞくりと肌に染み入る冷気。  
違う。

日が翳つたとか、そんなものではなく。

手から花冠が滑り落ちた。そして突如現れた大地の裂け目へ吸い込まれていく。

それにさえ気が付かず、コレーは目の前の圧倒的な存在を見上げる。

風に揺れる漆黒の長衣。

ぬばたまの黒髪。

ちらりと覗いた何よりも深い絶望の色をした瞳。

「っ……あ……」

フルトン

富める者

クリュメノス

名高き人

エルブレウス

良き忠告者

畏怖でもってその名を人間たちはそう呼ぶ。まるで本当の名は禁忌であるかのように、避けるかのように。

恐れる神。

不吉な神。

伸ばされる腕を避けることなんて出来なかった。

ただ恐怖で固まる身体がゆっくりと浮き上がり、四頭立ての馬車に乗せられる。

何が起こっているのかわからない。

何故ここにいるのだろうか。

ハリス

冥府の王。

捕えられたことがわかって、声をあげる術を忘れてしまった。喉は簡単に凍りついた。

風を切って、というよりは風と風の合間を縫って四頭立ての馬車は走り抜ける。

あるいは風さえこの冥府の王を恐れて道を空けるのだろうか。決して押さえつけられているわけではないのに、揺ぎ無い腕に抱えられてコレーはそんなことをぼんやりと考えた。

大きく深く口を開ける洞窟の中へ、長く続く階段が続いているのにちっとも振動は感じられない。

そうか。冥界に近づけば近づくほど、ハデスの力は増すのだろう。ならば馬車とて重さなど感じずに飛ぶことさえ出来るに違いない。母でさえ地上でそんなことは出来なかった。

コレーは自分が余りに強大な存在に捕まったことを感じずには要られなかった。

完全に陽の光が届かなくなったとき、ポツリとハデスが言う。

「疲れたか」

話しかけるといふよりは独白に近いような声の調子だ。

低くかすれた声は不思議に耳に届いた。

「疲れたなら、休むがよい」

何かを口にする前に、大きな手のひらがかざされる。

それから先、コレーは記憶を失った。

地上に帰してと泣き喚き慣れない恨み言を口にしながら数日を過ごしてコレーは状況を理解した。

ハデスはコレーが目を覚ました後、一度だけ顔を見せにきたがそれ



以来コレーの部屋にやってくることはない。

しかし冥府の女神であるヘカテはコレーに優しかった。

ヘカテが説明するところによると、コレーはハデスの妻として冥府に連れてこられたらしい。その婚姻自体はまだ成立していないが、ハデスの許しが必要ならば地上に戻ることは出来ない。

コレーは何故、と問い続けた。

何故自分が選ばれてしまったのか。

何故このような強引な手段に出たのか。

そしてどうしても聞くことが出来なかった問がある。

何故、ハデスは顔を見せにこないのか。

会いたいのかといわれれば、それは違う。

しかし連れてくるだけでそのまま放って置かれている状況にも納得できない。

納得がいけないといえば、ハデスの行動も妙だ。

一度だけ顔を見せたハデスだが、そのときコレーが地上に帰してと頼んだことには一切触れず、一方的に冥界の理を説明していった。

それは地上と冥界、属する場所を決めるための取り決めだ。

冥界の食べ物をお口にすれば、その者は冥界に属することになる。

だから食べるならその前によくよく考えろと言いつつ残していった。

卑怯者、略奪者と罵るコレーの声は耳に届いていないのだろう。

そんなことを言われなければ、コレーはいつか警戒心が空腹に負けて何か口にしていただろう。そうすればコレーは冥界に属することになり、ハデスにとっては万々歳ではないのか。

無理やり攫っておきながら、それ以降は何をするわけでもなくいてもいなくても良いような扱いだ。

「コレー様、何を考えますか？」

眉根を寄せていたのだろう。ヘカテが心配そうに声を掛けてきた。

コレーもヘカテには心を許すようになっていたので、あまり考える

ことなく思ったことを口にした。

「ハデス…様というお方は、どうして私を選んだのかしら」

「分かりませんか？」

「分からないわ。あれほど力のあるお方なら、もつと冥府の女王に相応しい女神を娶ることも出来るでしょう。私なんて、ただお母様に守られていただけの子どもだわ。花を摘んでそれを編んで…それしかしてこなかったのよ」

「だからですわ」

「え？」

予想外の答えにコレーはヘカテを見上げる。

ヘカテは微笑むと、コレーを窓へ導き重い窓を開ける。

「ご覧ください」

広がっているのは荒涼とした景色だ。

春の野原しか知らないコレーは思わず眉を顰めた。

「寂しい、ところね」

「ええ。そしてハデス様はずっとここにお一人」

ヘカテはどこか寂しげにそう言った。

「私などは暇を見つけて地上へ顔を出すこともございます。とはいっても、私はそもそも地下の住人ですので、ここでの生活は苦にはなりません。むしろ地上の華やかさが痛い。」

ですがハデス様はどうでしょう」

「あのお方には、一番似合いの場所だと思っけれど」

僅かに皮肉のこもった言い方にコレー自身が驚いた。

こんな嫌味な物言いをしたことがない。

コレーはこの冥府での生活で、今まで欠落していた喜怒哀楽を覚えていた。

「そう思われますか？ハデス様はあの派手好きのゼウス様や陽気なポセイドン様のご兄弟。本当にこの生活で満ち足りていらっしやるとは思えないのです」

そう言ったへカテの顔が複雑な色をしていたことに、コレーは気が付いていた。

しかし何と言えはいいのか皆目見当がつかない。

今までコレーの周りにいた者は、皆笑っていた。

たまに心配を覗かせるデメテルだって、コレーが笑えば笑ってくれた。

人の気持ちを押し量るのはとても難しい。

結局口を閉ざして拳を握り締めたコレーの頭をへカテは優しく撫でた。

「コレー様」

「……ごめんなさい」

「それで良いのですよ。そうやって悩んでください。ハデス様もそれをお望みです」

ハデスの望み。

それは何だろう。

同じ問いを繰り返しながら、コレーは何度目になるか分からない寝返りをうった。

常に薄暗い冥界の夜は際立って尚暗い。

初めて経験する眠れない夜にコレーは時間を持って余し部屋を出た。

誰かに会って話をして。そうすればいくらか気がまぎれるかもしれない。

靴音が響く廊下は一定の間隔で明かりが灯されていて、歩くのには困らない。

そして気付く。

誰か、とは誰だろう。

誰と話をすれば気が紛れると考えたのだろうか。

誰もいない。

母も。

ニンフたちも。

自分の周りを彩っていた者は、誰もいない。

「……っ！」

本能的な恐怖からコレーは走り出した。

長い廊下をがむしゃらに曲がって、自分がどこにいるのかはまるで分からなくなつたけれど、それでも「ここ」にいる自分が一人だと思ふよりはずっと良かった。

地上では感じなかった重みに足がもつれて息が上がる。

自分の足音だけが耳に響き、こめかみが酷く脈打った。

喉がひび割れるように痛み、心臓が限界を訴えた頃、廊下の奥に人影を認めた。

夜の暗さとは一線を描する、漆黒。

絶望と安寧の色。

コレーの足音には気が付いていただろうに、一向に視線を窓の外から動かさない。

その瞳が何を映しているのか、それが知りたくてコレーは息が整うのを待った。

「……逃げないのか」

静かな声が染み入るように響く。

誰の耳にでも届くようなものではなく、聞かせる者にだけ届けるのだと言いたげな。

「逃げる？」

また荒い息の下で、コレーは言葉の意味を問い質した。何から逃げるといふのだろう。

今この場所には二人しかないのに。

「何から逃げる、とおっしゃるのですか」

「私から、だ」

一体何を言っているのか。

無理やり連れてきておいて、次は逃げるとその口で言う。勝手が過ぎる。

「最近泣かなくなった、とヘカテが言っていた。怒りは覚えたか」

「……」

「何も口にしていないらしいな。身体は大丈夫なのか」

「……」

「賢明だ。この世界に留まりたくはないだろうからなくつくつとハデスが笑う。

すべてを諦めきったような、乾いた笑い。

耳障りで、そのくせ心が掻き毟られるような。

「お聞きしても、よろしいですか」

ハデスは何も答えないが、それでも良かった。

コレーの疑問に答えられるのは、ここに居るハデス以外に誰もいない。

「何故、私を」

その言葉にハデスが纏う空気が僅かに動いた。

そしてゆっくりと顔を向ける。

二人の視線は初めて正面からぶつかった。

一歩、ハデスが近づく。

思わずその分後ろに身体を引いたコレーに、ハデスは何を言うでもなく苦笑した。

「欲しいと思った。それだけだ」

「……え？」

「お前が欲しいと、そう思った。それだけだ」

「……わかりません。私には、わからない」

欲しいと思ったといわれても、そう感じられる態度ではなかった。最初の強引さが続くなら、あとは運命と諦められ流されることが出来たのに、与えられたのは賓客のもてなしと無関心だったではないか。

「そうだろうな。だから私は愚かだとへカテは言うのだろう。しかしそれも終いだ。」

……明日、お前を地上に帰そう」

言葉を咀嚼するまでに、若干の時間がかかった。

あの春に帰ることが出来る。

それは間違いなく嬉しくはあるけれど。

「長い間、すまなかつたな。お前には不意だろうが…私にとっては……」

私にとっては、何だったというのだろう。

しかしその先はいくら待っても出てこなかった。

立ち尽くすコレーを振り返ることもなく、ハデスは背中を向けて去っていった。

そして迎えがくるまでずっと、コレーはその場に立ち続けていた。まるで、答えを探すように。

翌朝、どこか寂しげなへカテが迎えにくるまでコレーは寝台の上で

膝を抱えていた。

地上に帰れるというのにまったく心が晴れない。

それには間違いなく、昨晚の邂逅が関係していた。部屋を飛び出さなければ良かった。

会わなければ良かった。

話なんかしなければ。

そしたらコレーのままですらられたのに。

「コレー様？お仕度が……」

「お願い、へカテ」

縫るようにへカテの服を掴む。

「ハデス様に、お会いしたいの」

「最後に恨み言くらい、聞いてやろう」

「ハデス様！」

へカテが叫ぶより早く、ハデスはコレーに宛がった部屋へ入ってきた。

「ヘルメスが早く連れて来いと急かすのでな」

その顔に昨晚窺えたような色はない。

最初のときのように傲慢で強引な冥府の王。

「あの……」

「外せ、へカテ」

その一言でもの言いたげであったへカテは消えた。

「どんな恨み言も受け入れよう。それだけのことをした自覚はある  
それだけのこと、とは何だろう。」

丁重にもてなされた。苦痛を与えられたわけではない。

「違います。そんなことは、関係ない」

僅かに揺れた瞳が向けられる。

ああ、やっぱり。

この人は悲しくて、何て愚かで。傲慢で、強引な。

気が付いたときには身体が動いていた。

高い場所にある頭を引き寄せ、冷たい唇に唇を重ねる。

驚きに目を見張るハデスに、コレーは至近距離で問いかけた。

「何故、私を？」

それは昨晚と同じ問い。

しかし逃がすものかという強さが加えられていた。

「…………。欲しいと思った。

デメテルの野原で花を摘むお前を見て、この暗い冥界にお前がいたらどれほど慰められるだろうかと。この…乾いた心が潤うだろうか、と」

絶対に口には出さないが、この冥界に飽き飽きしていた。

それでも死者はやってくる。

裁きを下す仕事はなくなるなら。

そんなときにゼウスに呼ばれ仕方なく地上にでた先で、見つけてしまった。

「届かない存在だと思おうとした。どうせ不幸にするだけだ、と。

だが…………」

そこでハデスは言葉を切った。

情けない真情を隠せるものなら隠しておきたい。

しかしコレーの若草色の瞳は、無言で続きを促していた。

「攫ってしまえば、デメテルが強硬手段にすることは分かっていた。だからそれまでの間に…少しでもお前が心を許してくれるなら、と」  
地上ではデメテルが豊饒の仕事を放棄し、あちこちで飢饉が続いている。

そうなれば大神ゼウスいえど無視は出来まい。最初から時限付きだと分かっていた。



「だから…私に、食べ物の説明を？」

口にしてしまえば冥界に属することになる。

本当は何も言わずにいようかとも思った。  
しかし。

「浅はかだな、私は。お前に。自ら選んで欲しいなどと」

それだけ聞けばもう十分だった。

次は、コレーが言わなければならない。

「私…ずっとお母様の娘と、呼ばれていました。ハデス様に攫われて初めてお母様の庇護から外れて、自分の物差しでものを見て…とても難しかった。私には何も出来なかった」

ハデスは何も言わない。ただ、黙って話の終着点を見定めている。

「悩みました。一晩中悩んで、それでも分からないんです。だから

……」

コレーはハデスの腕から抜け出すと、籠の中の石榴を手にとった。  
中には12粒。その中から4粒を手のひらに取り出す。

「一年のうち、この間だけ。そう…3分の1だけ、冥界で過ごします。そこで答えを見つけない」

「…待て！」

ハデスが止める隙もなく、コレーはそれを飲み込んだ。

喉を石榴が落ちていくと同時に、身体の中でそれを拒否する動きと受け入れる動きがぶつかり合う。

温かく幸せだった地上の光。

柔らかく心地よかった母の庇護。

でも。ごめんなさい、お母様。

私はここに来るまで、それが幸せだということさえ知らなかったの。  
焼け付くような痛みが引くと、呆然とするハデスにコレーは出来る限り優しく微笑んだ。

「名前を下さい」

「何をしたのか分かっているのか！？デメテルの下に帰れなくなる

！」

「いいえ。ハデス様さえ認めてくだされば、帰れます」

「何をしたのか、わかってしているのか？」

落ち着いた様子のコレーをハデスは信じられないといった目で検分する。

「はい」

「私は、口にした石榴の分はお前を手放すことはしない。分かっているのか？」

コレーの視線に耐え切れず、ハデスは目を逸らして手のひらで額を押さえた。

「ええ」

「私の妻になり冥府の女王となることだと、分かっているのか!？」

「…はい。あなた」

混乱し続けるハデスの頬に触れて、ゆっくりとコレーは繰り返す。優しい力に促されて、二人の視線が再び絡み合う。

「分かっています。ですから、冥府の女王に…あなたの妻に相応しい名前を下さい。娘コレーではなく、あなたの横にあるための名前を」

ハデスはゆっくりと目を閉じると、コレーをきつく抱きしめた。痛みさえ感じる強さだったが、それを不快には思わなかった。

「…ペルセポネ」

光を奪う女・破壊者

「ペルセポネ？」

「そうだ。冥府の女王に、相応しい」

「ペルセポネ……」

新しい名前を噛み締めるように繰り返す。

「ゼウスとデメテルの娘コレーは、あなたの妻にして冥府の女王ペルセポネとなりましたよ。」

地下から地上へあなたの安らぎをもたらしましょう。そして地上からあなたに春の華やぎを届けます」

「ペルセポネ……！愛している。この思いだけは、裏切ることはないと信じてくれ」

「はい」

頬に添えられた大きな手に齒向かうことなく上を向く。

漆黒の瞳を冷たい色だと思うことはもうないだろう。

これまでに暮らした環境が違うなら、理解できないこともあるだろう。

しかしそれでも。

「愛しています。これからは」

再び重なった唇は、痺れを切らしたヘルメスが迎えにくるまで離れることはなかった。

## 大神の恋人（前書き）

正統なギリシャ神話をお望みの方は、  
回れ右をお願いします。

## 大神の恋人

「…またなの？」

不愉快そうに眉を顰める女は優雅な手つきで額を押さえる。

すべて計算し尽されたような所作は見る者を圧倒する。彼女を飾る装飾具さえ、それを誇りに思っているようだ。

豊かな亜麻色の巻き毛に陶器の肌。

豊かな知性を讃えた紫の瞳は何者にも侵されない。

オリンポスの12神の1柱にして、大神ゼウスの妻。天界に君臨する女王ヘラ。

傳く侍女には不思議でならない。

どうして大神はこのような方を妻にしておきながら、浮名を流し続けるのか。

「ヘラ様……」

案じる声にヘラはゆっくりと立ち上がると、細い指で髪を払う。

優美な身体の線に沿って流れた服の裾を侍女はさつと整えた。

何も言わずに微笑まれるだけで、こんなに幸せな気持ちになれるのに。

これ以上の方なんて、どこにもいないのに。

何故大神はこの方を無下になさるのか。

侍女は歩き出したヘラの後ろに従う。

どうか今日だけはヘラ様が傷つかなければいいと思う。

それは毎回叶えられない願いではあるけれど。

「なんだ。出向いてくるとは珍しいな」

悠然と腰掛けるゼウスは何ら悪びれることはない。

「なんだ、ではごさいません」

デメテルの娘がハデスに攫われ、しかもそれにはゼウスが関係しているという。

結婚と母性を権能とするヘラにとって、看過できる話ではない。

たとえ大神が相手であろうとも、一步も引かないヘラに侍女は感銘を受ける。

「デメテルの嘆きが聞こえませんか。しかも…コレーはあなたの娘でしょう」

「娘のことを父親が決めて何が悪い？」

「親としての役割を果たしているなら、頷きましょう。ですがコレーが生まれてから、あなたは何もしていない」

冷え冷えとした空気が流れる。

二人の視線は互いを見据えたまま全く動かない。

しかしゼウスは短く息を吐くと、嘲笑うように口元をゆがめる。

「生憎、嫉妬深い妻がいるものでな」

ヘラは整った顔を崩すことなくそれを受け入れると、仕草だけで侍女を下がらせた。

後ろに控えていた侍女は気が付かなかったが、この時ヘラの顔には何の表情も浮かんでいなかった。

「……。」

一切の表情というものを捨て去ったヘラに、ゼウスは薄く笑う。

先程まで怒りで冷たい炎を宿していた紫の瞳は、今はただの硝子玉のようだ。

「相変わらず、詰まらない女だ」

くつくつと晒いながらゼウスはヘラに歩み寄り、その華奢な頤を捉える。

力に従って上を向いた顔は整っているだけに人形のようなようだ。

歯向かうのさえ面倒だというように、何を言われても受け流す以上のことはしない。

「屈辱だろう。結婚の女神が夫の不実を責めるとは。その権能を侵され続けるのは。」

「どんな気分だ？お前ほど哀れな女も珍しいだろうな」

屈辱的な言葉にも一切の反応を返さない。

そんなヘラに軽く口づけけると、ゼウスはヘラの腰を引き寄せ奥の部屋に誘った。

指が。

舌が。

身体を辿って熱を運んでくる。

「……つつ」

零れそうになる声を飲み込み、ただ時が過ぎるのを待つ。

そんな見え透いた努力をゼウスは嘲笑うかのように亜麻色の髪に指を絡める。

敏感になった肌は僅かな刺激にも、愚かしいほどの反応を示した。

「素直になればいいものを」

「……何に」

「知ったことか」

皮肉なお互い様だ。

人目がなければ殆ど会話がなことを思えば、寝台での二人は驚く

ほど会話がある。

それなのに時にヘラは耳を塞ぎたいほど苦しくなるときがある。

何故と自問するのはもう随分前にやめてしまった。答えを探すのは何故か苦しい。

「……んああっ！」

晒された首筋に舌が這い、ヘラは思わず悲鳴にも似た喜びの声を上げた。

足の先まで震えが走る。

ヘラは気力を振り絞ってゼウスを睨みつけたが、普段気丈なヘラが潤んだ瞳で強い視線を送ってもそれは皮肉なことに男の劣情を煽るだけの効果しかなかった。

「随分余裕があることだな？」

そんなはずはない。

ふるふると寝台の上に亜麻色の髪を広げたままで首を横に振る。波打つ髪が誘うような光を乱反射した。

いつだって余裕なのはゼウスだ。

今だって息も乱さず、飄々とヘラを嘲る。

ヘラが何かを考えられたのはそこまでだった。

「……んあああっ！」

突然突き立てられた熱に、身体が溶ける。

冷え冷えとした心を取り残したまま、少なくとも身体だけは二人は一番近くなった。

僅かな軋みとともにゼウスが寝台を抜け出していく。

これからどこに行くのか、それはヘラの知ったことではない。



だが情事のあとの気だるさの中で、まだ隣に残っているぬくもりに手を伸ばした。

次期に冷めていくだろう温かさに縋るほど愚かではない。そう自分に言い聞かせてヘラは寝台から身を起こす。

「つく」

身体から欲望の残滓が流れ落ちていく感覚に、ヘラは下腹を押さえた。

身を整えたら大神の妻に戻らなければならない。

高慢で不遜。それでいて守るべき者には慈愛に満ちた顔も持つ。

美しく気高い大神の妻。天界の女王。

「ふっ…はは」

自嘲する笑いは荒んだ思いをそのままに表している。

そんな存在はどこにいる。

どこにもいない。少なくとも自分ではない。

それでもヘラは演じる。終わらない時間、演じ続ける。

それがゼウスの望みだから。

「顔を上げなさい。デメテルの娘」

凜とした声に僅かに不快感を滲ませた表情。

夫の不倫相手の子どもを前にした不快感を押し隠す女神の顔はこんなものだろうか？自問しながら相手の反応を探ると、大きく外してもいないようだ。

「はい…ヘラ様」

淡い金色の髪に春の野の色の瞳。

なるほど愛らしい娘だと思う。ハデスが求めたのも無理はない。

「話は聞きました。デメテルはお前とハデスの婚姻は無効だと訴えているわ」

「…お母様つたら」

「お前の意思を聞きましよう」

場合によっては結婚は無効としてもいい。大神の許す範囲に限るが、デメテルの庇護を受けて生きてきた娘だ。

いじらしいほどのデメテルの過保護さに、嫉妬深い大神の妻を演じるヘラも見逃していたほどだ。

そんな娘が冥府での生活に耐えられるはずがない。

涙ながらに無効を訴えてくるものと思いついでいた。

用意していた演技は、それを冷静に諫め無知を咎めた上で婚姻の女神の権能を示すこと。それだけだった。

しかしコレーはデメテルの行為に小さく不満を漏らしたかと思うと、春の風とともにふわりと笑い臆することなくヘラに言った。

「私たちの婚姻は有効です。ヘラ様」

「…え？」

しまった。

大神の妻なら、ここは「は？」だろうか。あるいは「何と？」か。

しかしそんなヘラの見当違いな困惑を意に介さず、コレーはにこにここと笑う。

「私はハデス様にお約束しているのです。地上の華やぎを冥府にお届けする、と。私はハデス様を愛します。どうかヘラ様。私たちの婚姻を認めてください」

迷いなくコレーは微笑む。

その微笑は娘<sup>コレー</sup>ではなく、ハデスが与えたペルセポネという名が相應しい。

貼り付けた仮面の下で、ヘラは激しく混乱した。

無理やり奪われたのではなかったのか。少なくともデメテルはそう言っていた。

ならばどうしてコレーは笑えるのだろうか。

辛かったことも抱えた複雑な思いも飲み込んで、これほど美しくなったのか。

愛せるなどと言えるのだろうか。

混乱して口を閉ざしたヘラの態度を了承と取ったのか、コレーは踊るような足取りで辞していった。

生まれてから長い間、暗くぬるい場所で過ごしてきた。

そこには自分以外の誰かがいることは分かっていたが、何の興味も湧かなかった。

その場所はヘラを害することはなく、ただ閉じ込めているだけだった。必死で抜け出そうとも思えなかった。

後にその場所が父であるクロノスの体内であると知ったが、父に閉じ込められていたということがわかって何の感慨も湧かなかった。それ位、何もなかったのだ。

見事なまでに空っぽな存在だった。

そこに強い光が差し込まれたのは突然。差すような光に思わず目を塞いだのが、初めての自発的な行動だっただろうか。

父の中からヘラを引きずり出したのが、父の中に閉じ込められてい

た自分たちの弟と名乗る存在だった。  
名をゼウス。

妻に、と望まれたときそれが何を意味するのか分からなかった。  
空っぽの器に、丁寧かつある種の執念を持ってゼウスは必要なこと  
を教え込んだ。

今後天界に君臨する自分の妻に相応しい振る舞い。  
身の飾り方。

気高くあるにはどうすればいいのか。結婚を司る女神のあり方を。  
手の動かし方から扇の使い方まで、大神の妻に相応しくあるべくす  
べてのことを教え込まれた。

今のヘラはその教えを愚直に守っているに過ぎない。  
そこから外れた事態が起これば、どうすればいいのか分からずに途  
方にくれてしまうだけだ。

だからヘラはゼウスと二人になるとどうしていいのか分からなくな  
ってしまう。

ゼウスはどうすればいいのか教えなかった。

二人になるとどこか胸が苦しい。

それなのにヘラにはそれを言葉にする術がない。

他の兄弟たちはとづくに個性を手に行っているというのに、ヘラはま  
だ父の中にいたときと何も変わっていないのだ。

それでも気が付いてしまったことがある。

どこか自分と似ていると思っていたコレー。

笑うことしか知らなかったはずの娘が、いつの間にか少女から女に  
なった。

自分の頭で考え、心に訊ねることができるようになっていた。

それはおそらく、ハデスに会ったからなのだろう。

それだけの思いが、二人の間にはあるのだろう。

自嘲するしかない。

自分にはそんな変化は絶対に訪れることはない。

泣くことさえ出来なくて、ヘラはまた仮面を被って役者に戻った。

宴のない静かな夜が好きだ。

星もなく、月も雲に隠れてしまうような陰気な夜が好きだ。

そんな夜の次の朝は、ヘラは仮面を被って演技をする必要がない。

夜毎ゼウスが他の女の下へ駆けて行くのが見えないから、嫉妬に狂う演技をする必要がないのは楽だった。

よく分からないことではあるが、その演技をしている間ヘラは常に演じている自分に羨望を感じている。内心は怒り狂う気力などここにもなく、ただ奇妙にぼつかりと胸に空いた穴の存在を感じているのだ。

感情を表に出してそれを相手にぶつけるなど、どれほど気力と体力がいることだろう。

石造りの宮殿はヘラが裸足で歩く音を吸収し、いない者として扱ってくれる。

侍女を従えることもなく、ただ気の向くままに歩くのはいつ以来だろう。一番夜風が気持ち居場所を探してヘラは夜の散歩を楽しむ。纏わりつくようなぬるい風に誘われ、たどり着いたのは宮殿の西端に位置するバルコニーだ。

こんな夜にここに来る酔狂はいないだろうと思っていたのに、そこ

には先客がいた。

「……へラか」

低い声はいつもより穏やかだ。

呼びかけられてしまつては辞することも出来ず、へラは恐る恐るゼウスに近づいた。

座っていた長椅子の片側に寄つた、ということはここに座れという意味表示だろうか。

迷いつつも意識して距離をとつて腰かけると、その距離にゼウスが苦笑する。

「変わらないな、お前は」

「変わる術を、存じません」

「そうだろうな。しかしお前以外はどんどん変わっていく。」

ガイアも私に二度も刃を向けた。あれほど親身になつて私にこの地位を授けたというのにな」

ガイアの怒りはへラも覚えている。

あの事件に関してはガイアとゼウスどちらが悪いとは言えない。ただガイアが思い描いていた未来図とゼウスの選択が一致しなかつただけだ。

しかし二度目にはゼウスも相当に危機的な状況に立たされた。ヘルメスがいなければオリンポスはどうなつていたのか分からない。

「お前、あのときどうする心算だつた？」

「と、おつしやいますと？」

「私があのまま臆を盗まれ、動けず、テュポがこの天界に君臨することになつたら。だ」

もし、の話をするなんてらしくない。

そう思いつつもへラは言葉を搜す。思い出したくもないあのときの絶望を、必死に手繰り寄せる。

「もし、そうであつたなら」

あの時、ゼウスから離れて不安に揺れる神々をまとめていたのは大神の妻としてだ。

もしゼウスが大神という地位を追われれば、ヘラもその地位を失うだろう。

「あなたのお側にいたでしょう」

「何のために」

「お側にあるために」

臆を失い動くこともできない哀れな男の側に、何も持たない女が侍ることくらいテュポンも許すのではないだろうか。

滑稽でも哀れな姿でもいい。そのときは既に大神の妻ではないのだから。

二人の間に夜風が走る。

ヘラの結び上げていない髪を乱して、衣の裾を遊んでいく風は決して暴力的ではない。

舞い上がった髪で一瞬視界を閉ざされたヘラが次に見たのは、これまでに見たこともないようなゼウスの顔だった。

「……何かおかしなことを言いましたか？」

「いや…否、そうだな。妙だ」

少なからずヘラは不快感を覚えた。

聞かれたから答えただけだ。それなのに妙と言われる筋合いはない。そんなヘラの僅かな表情の変化を読み取ったのか、ゼウスは自嘲するよつに言う。

「考えてもみる。お前の行動はまるで男を慕う女のそれだ。まあ私が弱っていく姿を晒うためというなら納得するが」

「……そうでしょうか…そうなのかしら？」

そんなことは全く意識していなかった。

ただ、そう行動するのだろうなと思ったただけだ。

慕う？

私が？

ゼウスを？

「私は、あなたの事が好きなのでしょうか？」

「……知るか！」

単刀直入な疑問をゼウスはぱつさり切つて捨てた。思い切り逸らされた顔に傷つかないわけではない。

それでも浮かんだ疑問を解決することのほうが重要に思えた。

「あなたに分からないものは私にも分かりません。だって私のすべてはあなたがそう創つたのですから」

ヘラにしてみれば当然の言い分だ。

しかし向き直つたゼウスは予想外のことを口にした。

「ならば」

その表情は月が厚い雲に隠れてしまったせいで窺うことは出来ない。存在自体が影のようだ。

「ならばお前は、私がそうだと言えば私を愛するのか」  
言葉を失つたヘラの頬にゼウスの手が添えられる。

開けていたはずの距離がいつの間にか詰められていたことに戸惑う。しかし触れ合っているのは手だけだというのに、動くことを許さない強さがあつた。

「答える。お前の心は、そんなもので手に入るのか」

「…どうして」

そんな声を出さないで欲しい。

そんなことを言わないで欲しい。

「やめてください。勘違いしてしまいそうになる」

「何を、だ」

「…っ！何を！私に何を言わせれば気が済むのですか」  
すべてを言わせないと気がすまないのだろうか。

そんな傲慢に大神の妻は答えるべきなのだろうか。

ヘラは自分が混乱していることには気が付いていた。  
だが頬に添えられた手が動くまで、泣いていることには気が付かなかった。

「いつ以来だ。お前が泣くのは」

ゼウスは悪くないと言った。

それがどういう意味なのか考える前に感じた吐息に、ヘラは反射的



に腕を突っ張ってゼウスの胸を押し返した。

一瞬の居心地の悪い沈黙の隙に、ヘラは立ち上がるとその場を後にした。

決して走らないように、焦っていることが知れないように。

そんなことを意識している時点で、ヘラはゼウスに負けているのかもしれない。

自室に戻って扉を閉めるなり、ヘラはずるずると扉に背中を預けて座り込んだ。

顔が熱い。

鏡を見ればみつともないほど紅潮しているのだろう。

「……………っう！」

長々と話し過ぎたから。

だからあんな話をしてしまったのだろう。暇つぶしにからかわれただけ。

そう思うのに、頬の熱さは引かない。

どうしたって考えてしまっう。

私はゼウスの事を慕っているのか。

これほど長い間夫婦でいたのに、今更それを考えるのは滑稽だ。

傲慢。不遜。身勝手。浮気者。

考えてみればそんな最低の男なのに、長い間一緒にいたのは何故？

「……………っう！！！」

ヘラが頭を抱えた頃、ゼウスは満足げに笑う。  
いつまでも少女のような妻。

それを知っているのは自分だけで、それはそれで良かった。  
大神の妻として求めたように振舞ういじらしさも、悪くなかった。

「…だが、な」

そろそろこの腕に堕ちてきてもいいだろう。

初めて目にした瞬間に心奪われた唯一の女。

他の女は強引に奪う。ただそれだけで、奪われてやるつもりは全く  
無い。

ただヘラだけは、互いに奪い合う関係になってもいいと思った。

ヘラだけは、自分との関係が終わった後に他の男のものになるなど  
考えられなかった。

他のすべてを教えたように、自分を愛せよというのは簡単だ。  
きつと何の疑いも無く、ヘラはそう振舞うのだろう。

しかしそれでは何の意味も無い。

他の選択肢はすべて奪った。

最後の選択肢は一つしか用意していない。

しかしそれを手に取るのはヘラの意味だ。

今頃頭を抱えているのだろうか。簡単に思考が分かるだけに、いじ  
らしい。

さあ、堕ちて来い。

私が奪いに行く前に、自分の意思で。

## 大神の恋人（後書き）

へらって彼女自身のエピソードが凄く少ないんですね。

ゼウスの浮気に怒っているのはたくさんあるのに…これは何かあるか？という妄想から生まれた「大神の恋人」です。

次がいつになるのかは分かりませんが、次話はゼウスサイドのお話をアップしたいなと思っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2706/>

---

ギリシャ神話異聞

2010年10月11日22時22分発行